

# アジア研究図書館

編集・発行：東京大学附属図書館アジア研究図書館 研究開発部門

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当 [asialib@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib@lib.u-tokyo.ac.jp)

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

## 第4号 目次

研究開発部門 (RASARL) 発足	1	連載・奇書・好著 —“書痴学”の勧め— 第4回	8
連載・先達の先見 第4回	2	塚本鷹充 (東大所蔵)江戸の書画家たちの蔵書とその行方	
佐藤慎一 アジア研究図書館構想誕生の過程		連載・アジア映画の迷宮 第4回	11
連載・アジアの言語・文字体系 第4回	5	徳原靖浩 メフルジュイー『ハームーン』	
梶原三恵子 サンスクリット語と文字		アジア研究図書館利用案内	14
		次号の予定	14

## 研究開発部門 (RASARL) 発足

附属図書館は、2021年4月1日よりアジア研究図書館研究開発部門 (Research Advancement Section for the Asian Research Library, 略称 RASARL) を設置し、三名の教員が着任しました。世界最高の教育研究を支える環境整備に向け、研究支援や蔵書構築等のアジア研究図書館運営、サブジェクト・ライブラリアン制度の確立と普及を目指し活動していきます。

### 専任教員紹介

#### 准教授 河原 弥生 (かわはら やよい)

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了、博士 (文学)。専門は中央アジア・イスラーム史。主要業績に、Muhammad Ḥakīm Khān, *Muntakhab al-tawārīkh*, I-II (共校訂、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2006-2009)、「コーカンド・ハーン国史としての『選史』」『西南アジア研究』91 (2020)。

#### 助教 河崎 豊 (かわさき ゆたか)

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士 (文学)。専門はインド学・仏教学。主要業績に『増支部経典第六巻』(共訳、春秋社、2019)、「ジャイナ教における諍と滅諍」『ジャイナ教研究』26 (2020)。

#### 助教 鈴木 舞 (すずき まい)

北海道大学文学部卒、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了、博士 (文学)。専門は殷周青銅器研究、中国をはじめとする東アジアの考古学。主要業績に『殷代青銅器の生産体制—青銅器と銘文からみる工房分業』(単著、六一書房、2017)、「宰梟角から見る殷周金文の鑄造技法—レプリカ法及び三次元デジタル (ポリゴン) データ解析からのアプローチ」『泉屋博古館紀要』35 (2020)。

# アジア研究図書館構想誕生の過程

佐藤 慎一

(さとう しんいち 名誉教授 元東京大学理事・副学長)

東京大学の全学的プロジェクトは、大学本部の主導によって企画・推進されることが多く、2004年4月の国立大学法人化以降はその傾向がさらに強まっています。アジア研究図書館は、法人化以後の全学的プロジェクトでありながら、文系部局長たちが中心となって企画・推進したボトムアップ型のプロジェクトで、そこにアジア研究図書館のひとつの重要な特色があると私は考えています。以下、だいぶ薄れた10年前の記憶を呼び覚まし、アジア研究図書館プロジェクト誕生の過程を再現したいと思います。

## 1. 濱田総長の依頼

2009年4月に就任した濱田純一総長（在任：2009年4月～2015年3月）は、私を教育・入試担当の理事・副学長に任命すると共に、「文系エンカレッジメント」という特命の課題を私に与えました。

前任の小宮山宏総長（在任：2005年4月～2009年3月）は、就任直後に東京大学アクション・プランを公表し、東大を「世界の大学」にするための大胆な施策を打ち出していました。元工学部長である小宮山総長の発想は、多くの文系部局にとって馴染みにくいものでした。小宮山総長のもとで4年間にわたって総務担当理事・副学長を務めた濱田総長（元情報学環長）は、文系部局が法人化体制から取り残されかねないことを憂慮し、文系部局が元気になる

ような前向きな企画を考えて欲しいと、元文学部長である私に依頼されたのだと思います。これがアジア研究図書館構想の端緒です。

## 2. 文系部局長の懇談会

文系部局が元気になるような企画を考え出すために最初にやるべきことは、文系部局長全員が一堂に会して意見交換をすることです。当時の東大には、学部長同士の親睦会や研究所長同士の親睦会はありましたが、なぜか学部長と研究所長を共にメンバーとする親睦会はありません。利用できる既存組織がないのなら、新たに作ればよい。私は9名の文系部局長に参加を呼び掛けました。井上正仁法学部長、小松久男文学部長、伊藤元重経済学部長、武藤芳照教育学部長、羽田正東洋文化研究所長、末廣昭社会科学研究所長、加藤友康史料編纂所長、石田英敬情報学環長、そして山影進教養学部長です（教養学部は文系部局ではないものの、教員の半数以上は文系です）。全員が呼びかけに応えてくれました。

この年は春先に新型インフルエンザが流行し、五月祭の開催が危ぶまれた年です。私も部局長も多忙をきわめて日程調整が難航し、第1回目の会合が開催されたのは7月6日のことでした。会場は東文研所長室。文系部局長の懇談会は以後、ほぼ隔月のペースで、各部局長室を会場にして開催されることとなります。

### 3. 浮上した共通の課題

文系部局長懇談会の開催を呼びかけた私は、懇談会スタートの時点で、「文系エンカレッジメント」の内容に関する具体的なアイデアを何ひとつ持ち合わせていませんでした。有能な文系部局長たちが懇談を続けるうちに、おのずといいアイデアが出てくるはずだというのが私の基本スタンスで、懇談会はアフター5にお酒を飲みながら行なうことし、その結果まことに活発な意見交換の場になりました。アジア研究図書館構想の策定過程における、私の唯一にして最大の貢献と言えるでしょう。

懇談を続けるうち、文系部局長たちに共通した深刻な悩みの種が、増え続ける書籍の収納場所であることが次第に分かりました。同じ図書問題でも、理系部局は電子ジャーナルの価格高騰に悩んでいましたが、文系部局は増え続ける書籍を収納するスペースの不足に悩んでいたのです。

この問題は過去にも検討されたことがあったようです。法人化直後、小石川にある医学部附属病院分院跡地をどのように活用するかが問題となった際、国際宿舎を設置する案や高等研究所を設置する案と並んで、大型の文系書庫施設を設置する案が検討の俎上に載せられたことが、記録に残っています。最終的に、東京大学の国際化を重視する小宮山総長は、東大に長期滞在する外国人研究者や留学生を収容するための大規模な国際宿舎を分院跡地に設置することを決断し、文系書庫施設設置構想は放棄されます。この放棄された文系書庫施設設置構想を本郷キャンパスで実現することが、文系部局に共通した願いであり、「文系エンカレッジメントは何か」という濱田総長の問いに対する回答の第一歩であるということになりました。

なお、仮に文系書庫施設が実現した場合、施設内に区分を設け、このスペースは〇〇学部の領域、このスペースは〇〇研究所の

領域にするというような、部局の都合を優先する発想は捨てて、あくまで部局共通の利害を実現する最善の方法を模索しながら構想を練ることが、この段階で申し合われたという記憶があります。この申し合わせも、アジア研究図書館構想につながるものです。

### 4. 地下書庫構想

ここから先は、文系部局長だけの力で進めることは不可能です。本部から前田正史理事・副学長（財務・施設担当）、総合図書館から古田元夫館長に加わって頂くことにしました。2009年暮れのことと記憶します。お二人とも文系部局長懇談会の議論の流れに積極的に参加して下さり、本部と総合図書館を巻き込んだ強力なスクラム体制ができあがりました。

元生産技術研究所長の前田理事は生粋の工学者ですが、『河西の歴史地理学的研究』等の著書のある歴史地理学者の前田正名氏を父親に持ち、その薫陶の賜物か文系の学問に対する敬意と理解力をお持ちで、親身に相談に乗ってくれました。前田理事は施設担当として、東大の施設整備に関する全てのデータを頭の中に入れていましたが、その前田理事にしてなお、過密状態の本郷キャンパスに文系書庫施設を建設するためのスペースを探し出すのはきわめて困難な課題でした。前田理事は、おそらくキャンパス計画室に集まる専門家たちに相談したのだと思いますが、やがて部局長たちの誰もが想像していなかった解決策を提示してくれました。それは、図書館前広場を掘って地下に巨大な書庫を作り、そこに数百万冊の図書を収容し、コンピュータ化されたシステムで出納を管理するという構想です。前田理事の説明では、地下書庫はアメリカのシカゴ大学等で既に実用化されているとのことでした。この前田提案によって、計画作りは大きく前進することになります。

## 5. そしてアジア研究図書館構想へ

巨大な地下書庫が作られれば、総合図書館の役割や内部配置は大きく変化するはずです。生まれ変わる新総合図書館の特徴をどのように打ち出すかが議論される中で、アジア研究図書館設置構想が誕生しました。理系を含む東大の各部局には、膨大な数のアジア関係図書が蓄積されており、それを新総合図書館に集め、地下書庫によって余裕の出来る開架フロアに配置すれば、世界有数のアジア関係図書のコレクションが出来るはずで、それを新総合図書館の目玉にしたらどうかというアイデアです。

最初に言い出したのは小松文学部長と記憶しますが、重要なことは、他の部局長たちが即座に小松提案に呼応したことです。このときの文系部局長懇談会には、何故か多くのアジア研究者が集まっていました。小松文学部長は中央アジア史研究、山影教養学部長は東南アジア研究・国際関係論研究、羽田東文研所長はイラン研究・イスラーム史研究、末廣社研所長はタイ研究・アジア経済研究、古田館長はベトナム史研究、そして私は中国思想研究が専門でした。自らアジア研究を行なう者にとって、小松提案はまさに「我が意を得たり」というものだったので。部局長のどなたかが、以下のような発言をされたことが記憶に残っています。

日本を代表するアジア研究拠点は駒込にある東洋文庫で、東洋文庫の所蔵する書籍を閲覧するために世界から研究者が集まってくる。もしも東大総合図書館に東大の所蔵するアジア関係の書籍を集めて一大ライブラリーを作ることができれば、近接する駒込と本郷に世界有数のアジア研究拠点が存在することになり、世界から多くのアジア研究者が訪れることになるだろう。それは、東大を舞台とするアジア研究者の

国際交流の活発化に確実に貢献するはずだ。

この発言を聞いて、濱田総長の問いに対する回答はこれで完成したと、私は感じました。文系部局長懇談会のメンバーが、アジア図書館設置を含む新図書館構想に関する提言を濱田総長に提出したのは、2010年9月のことです。

## サンスクリット語と文字

梶原 三恵子

(かじはら みえこ 東京大学人文社会系研究科教授)

インドの古典語であるサンスクリット語（古インドアーリア語）は、固有の文字をもたない。むしろ古代から大量の文献が文字によって伝わっているのだが、サンスクリット文字という決まったものがあるわけではない。

現代のインド政府は、ヒンディー語をはじめとするいくつかの北インド地域の言語に用いられるデーヴァナーガリー文字を、サンスクリット語の表記に充てている。それでも、地方によってはいまなお、それぞれの地域の文字もサンスクリット語の表記に用いられている。

最古のサンスクリット語のテキストは前12世紀に遡るヴェーダ聖典である。これは師から弟子が口頭で教わって暗唱し継承すべきとされるものであった。文字ができてからは、暗唱練習の心覚えのために書きつけることはあったであろうし、それが写本という形につながっていったのかもしれないが、ヴェーダ聖典の少なくとも古い部分は、あくまで口頭伝承が原則であった。のちに発展した文学や科学など諸分野のサンスクリット学術文化は、書写によって伝承され拡散されたが、サンスクリット語を表記する文字が一種類に固定されることはなく、各時代に各地域の文字が用いられた。

まとまった量の文字の使用がインドで最初に確認されるのは、前3世紀にアショーカ王がインド各地の摩崖や岩や石柱に刻ませた、アショーカ王碑文群においてである。碑文の言語はサンスクリット語ではなく、

プラークリット語と総称される中期インドアーリア諸語である。インド北西部の碑文には、ギリシア語やアラム語で記されたものもある。

アショーカ王碑文に主に用いられているのは、ブラーフミー文字とよばれるものである。北西部の碑文には、カローシュティー文字、ギリシア文字、アラム文字もみられる。このうち、ブラーフミー文字とカローシュティー文字が、インドで作られた文字とされている。

カローシュティー文字は、その後もインド北西部地域で数世紀にわたって用いられたらしい。この文字で書かれたものとしては、紀元前後とみられる仏教文献の写本がガンダーラ地方から出土している。

一方、ブラーフミー文字は、時代につれて北方系と南方系にわかれ、様々な形状に発達しつつ、インド各地で用いられる多くの文字の基礎となった。

4世紀に北インドでグプタ朝が興ると、サンスクリット語による文学作品が数多くつくられ、古典サンスクリット文化が花開いた。この王朝で用いられたのは、ブラーフミー文字の系統をくむグプタ文字であった。グプタ文字は、その後の北インドの各種の文字の源となったとされる。シッドハートリカー文字（中国を經由して日本に伝わった悉曇〈しつたん〉文字はこれの亜種とされる）、シャーラダー文字、各種のナーガリー文字などがつくられていった。前述のデーヴァナーガリー文字は、ナーガ

リー文字の系統の一種である。南方系のブラーフミー文字には、新しいところでは現代南インドで用いられているテルグ文字、カンナダ文字、タミル文字、マラヤーラム文字などがある。

サンスクリット語は南インドにおいても広く用いられ、多くの文献がうみだされた。テルグ語やマラヤーラム語は、サンスクリット語が属するインドアーリア語とは言語系統が異なるが、それらの文字はサンスクリット語の表記にも用いられてきた。タミルナードゥのように、タミル語用のタミル文字のほかにグランタ文字というサンスクリット語表記用の文字をもつ場合もある。

ブラーフミー系の文字は、一個の文字が字母として母音を伴う、いわゆる音素音節文字である。字母は基本的に *-a* という母音を伴っており、他の母音を伴わせたいときはその母音の記号を加える。

デーヴァナーガリー文字の場合、たとえば *स* という文字は *sa* という音を表す。*s* という子音に *a* という母音が伴っている。字母 *स* に他の母音の記号を付すと、*सि*(*si*)、*सु*(*su*)、*से*(*se*) のように、*s* で始まる他の母音を伴う音節を表せる。

字母は、そのままでは子音と母音に分けられないため、子音連続や単独子音を表記できない。この問題をどう解決するかは文字にも言語にもよるが、デーヴァナーガリー文字でサンスクリット語を表記する場合は、字母を分割して結合させるか、母音をキャンセルする記号を付す。*ska* という音を示すとき、*स*(*sa*) + *क*(*ka*) と並べると *सक*(*saka*) となってしまうので、*स* の半分を省いて結合させ *स्क*(*ska*) とする。*s* という単独子音を表すときは、*स*(*sa*) に母音キャンセル記号を付して *स्*(*s*) とする。*samskr̥tā* 「サンスクリター」(「完全に作られた [言葉]」; サンスクリット語という名前の由来) を表記すると、*संस्कृता* となる。

॥१॥ अग्निमीळे पुरोहितं यज्ञस्य देवमृत्विजं । होतारं  
रत्नधातमं ॥१॥ अग्निः पूर्वभिर्भूषिभिरीड्यो नूतनैरुत । स  
देवाँ एह वक्षति ॥२॥ अग्निना रयिमश्नवत्प्रीषमेव दिवेदिवे ।  
यज्ञसं वीरवत्तमं ॥३॥ अग्ने यं यज्ञमध्वरं विश्वतः परिभूरसि ।  
स इहेवेषु गच्छति ॥४॥ अग्निर्होता कविक्रतुः सत्यश्चित्रव-  
स्तमः । देवो देवेभिरा गमत् ॥५॥१॥ यदंग दामुषे तममे

〈デーヴァナーガリー文字で印刷された『リグ  
ヴェーダ』、冒頭部分〉

類似の方法は他のブラーフミー系文字でも用いられる。母音記号の位置や、文字結合と母音キャンセル記号の使い分けは、文字によって異なる。現代マラヤーラム文字の場合、*m* (*sa*) という字母に各種母音記号をつけると、*mī* (*si*)、*mṛ* (*su*)、*ṁm* (*se*) のようになる。

音を確実に表記できればよいという観点からいえば、インドの文字でなくともいいわけで、特に学問の分野では、ラテン文字(ローマ字)に種々の付加記号をつけてサンスクリット語を表記することが行われている。たとえば、*samskr̥tā* と表記するときは、歯擦音 *s* の前の鼻音を *m* の下に黒い点をつけて示し、母音の *r* は白抜き丸を文字の下につけて、*a* の長母音は上に長音記号をつけて表している。

Agnim ile puróhitaṃ yajñásya devám ṛitvijam | hótāraṃ  
ratnadhātamaṃ || 1 || agniḥ pūrvabhīr rīshibhīr idyo nūtanair  
utā | sā devāñ éhā vakshati || 2 || agniṇā rayim aśnavat  
pósham evā divé-dive | yasāsaṃ virāvattamaṃ || 3 || agne  
yām yajñám adhvaram viśvataḥ paribhūr asi | sā id de-  
véshu gachati || 4 || agnir hótā kavikratuḥ satyāś citrāśra-  
vastamaḥ | devó devébhīr ā gamat || 5 || 1 ||

〈ローマ字で印刷された『リグヴェーダ』、冒頭  
部分〉

現代のインドで、サンスクリット語表記に主としてデーヴァナーガリー文字が充てられている背景には、インド憲法によってヒンディー語が連邦公用語に認定され、その文字にデーヴァナーガリーが定められたことが大きいとみられる。ルピー紙幣には

17種類の言語で額面が記されていて、うちヒンディー語と英語以外の15種類は文様のようにならべられている。憲法附則で指定言語の一つとされているサンスクリット語も後者の中に、デーヴァナーガリー文字で書かれている。

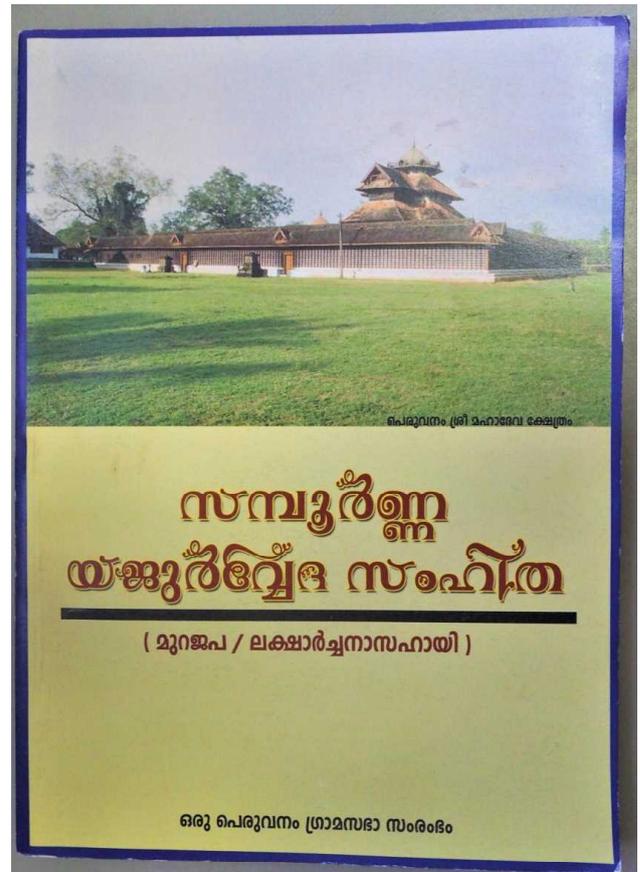


〈100ルピー札の一部：縦に並べられた15言語のうち下から4つめが、デーヴァナーガリー文字で記されたサンスクリット語〉

サンスクリット語の文献は、時代につれ、地域をまたいで、文字からまた別の文字へと写されてきた。現代インド政府は写本の収集を進めているが、公立図書館に収蔵されている写本のうちデーヴァナーガリー文字のものは、もとはその土地の文字で書かれていたものが、図書館に収められる際にデーヴァナーガリー文字に転写されたものも多いとみられる。

手書きの写本の時代から活字印刷の時代になってからも、地方ではデーヴァナーガリー以外の文字でのサンスクリット語の出版がみられた。地域によって異なる文字に

よるサンスクリット語の表記や印刷は、少なくなったとはいえ、今も存続している。



〈「ヤジュルヴェーダ サンヒタ」とマラヤーラム文字で印刷された『ヤジュルヴェーダ [タイティリーヤ] サンヒター』の表紙〉

〈参考文献〉

鈴木義里 2001. 『あふれる言語、あふれる文字——インドの言語政策』 右文書院.  
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編 2005. 『図説アジア文字入門』 ふうろうの本、河出書房新社.  
町田和彦 2011. 「インド系文字のはじまり」 『フィールドプラス』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編 5: 4-5.  
Bühler, G. 1896. *Indische Palaeographie: von circa 350 a. Chr. - circa 1300 p. Chr.* (Grundriss der indo-arischen Philologie und Altertumskunde, 1. Bd., 11. Heft).

## (東大所蔵) 江戸の書画家たちの蔵書とその行方

塚本 磨充

(つかもと まろみつ 東京大学東洋文化研究所教授)

コロナで在宅勤務が推奨されるなか、自ら足を運び書物と直接出会う時間のありがたさを改めて実感するようになった。「中国美術史」という同学の士との出会いがなかなか少ない専攻のゆえか、それは過去の先輩たちの存在を感じる瞬間でもあり、特別に心励まされる時間でもある。

もう二十年も前に私が大学生活を送った東北大学の書庫には富岡鉄斎旧蔵の拓本がたくさんおさめられており、題箋はあの自由奔放な書でかかっていた。先人たちと同じ拓本を手にとることができるのは何ものにも代えがたい至福の時間であり、全国に散らばった鉄斎旧蔵の書物にはその後も就職した先々でお世話になることとなった

(東洋文化研究所所蔵の『図絵宗彝』(明版)もまた鉄斎の旧蔵である)。最初に学芸員として拾っていただいた奈良の大和文華館は、初代館長の矢代幸雄が美術館とともに美術館研究所の設置を構想していたため、収集につとめた美術図書は非常に充実しており、展示に使えるような貴重書も多かった。そのご異動した東京国立博物館(以下、東博と略称)の資料館には江戸時代以来の様々な蔵書が保管されており、特に一橋家・徳川宗敬氏から昭和18年(1943)に寄贈された「徳川本」の存在は、筆者にはじめて江戸時代の書物の世界というものに目をひらかせてくれた。

上野から言問通りの坂をおりて徒歩約20分のところにある東京大学にもまた素晴らしい蔵書がある。なかでも感謝しきれない

のは紀州徳川家・徳川頼倫氏から大正13年(1924)に寄贈された「南葵文庫」の存在で、美術研究の資料として非常に価値の高いものも含まれている。『佩文齋書画譜』(図1、1708年)は「寛政戊午(1798)」の年紀と「昌平坂学問所」印があり、この全百巻におよぶ清朝の一大叢書がいちはやく日本に伝えられていたことを知る重要な例である。東博から東大に異動になって気が付いたのは、図書館で貴重な書籍を開くとその旧蔵者印に、両者に共通する旧知の名前が多くあることであった。



図1 『佩文齋書画譜』(「昌平坂学問所」印、南葵文庫) 島田氏双桂楼(島田篁村旧蔵)

例えば仏教に関する様々な画題を解説した『仏祖図録目録』(図2)は木挽町狩野家の最後の当主・狩野雅信(1823-1879)の旧蔵書である。幕府の御用絵師のうち最大の勢力を誇った同家だが、明治維新後は美術教育機関としての役目を上野に新しく開設された美術学校に譲り、自身は政府の博物局などに勤務

した。同家が歴代にわたって制作し続けた6,000件にもおよぶ模本類は今も東博に所蔵されているが、各地に分散したその旧蔵書については今後の調査が俟たれている。南宋時代の古物や日用の趣味について集めた『洞天清禄集』抄本(図3)は『宋淳熙敕編古玉函譜』とともに市河米庵(1779-1858)の旧蔵書。幕末最大の書家といえる市河米庵の豊富な中国書画金石拓本コレクションは、子の三兼、孫の三鼎によって帝室博物館に寄贈され、現在も東博コレクションの基礎となっている。米庵の旧蔵書は国会図書館などにも分蔵されているが、朱字書込「天保二年秋与掖齋先生對読 保孝」(岡本保孝と狩谷掖齋のこと)のある『官板洞天清禄集』(昌平叢書、文化七年刊(1810)、南葵文庫)とともに、中国の芸術論が江戸時代にどのように読まれていたのかを知る重要な史料と言えるだろう。



図2 『仏祖図録目録』(「木街狩野氏之文庫」印、南葵文庫) 小中村清矩旧蔵

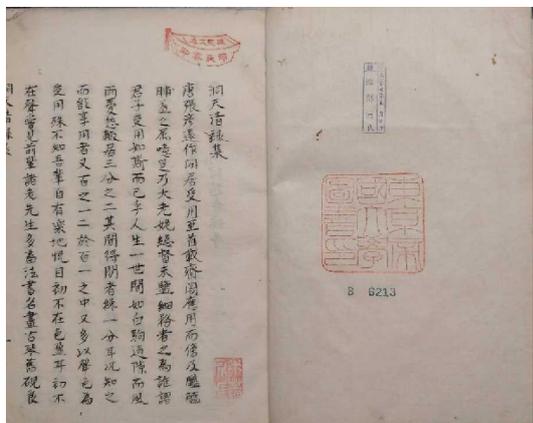


図3 『洞天清禄集』抄本(「米庵所蔵」印) 渡部信寄贈

一方、『石渠随筆』抄本(図4)、『絵事備考』抄本(図5)はともに、渡辺崋山の弟子として知られる江戸の文人画家・椿椿山(1801-1854)の旧蔵書である。欄外に朱字書込みが多数あり、『絵事備考』巻二末には「天保三年九月廿三日校 弼」、巻三には「壬辰九月廿五日燈下校 弼」とあるので一卷を二日余りで校読していることとなる。これらの書物は、大正13年に渡部信(1884-1973)から寄贈されたもので、なかには父・渡部邁による古画筆記類もふくまれているが、渡部信はのちに帝室博物館の総長(1939-1944)となり、戦時下のもとの疎開をすすめた苦勞の多かった総長としても知られている。

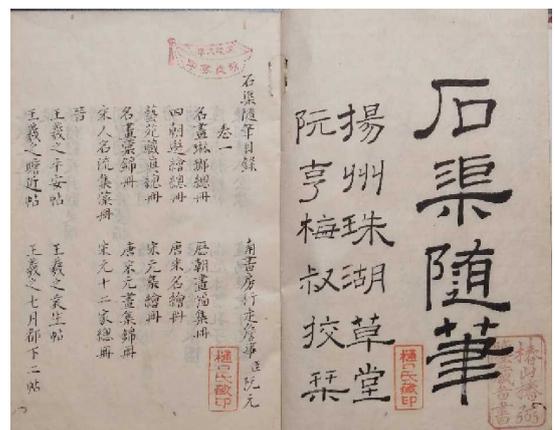


図4 『石渠随筆』抄本(「椿山椿弼鑑蔵図書」印) 渡部信寄贈

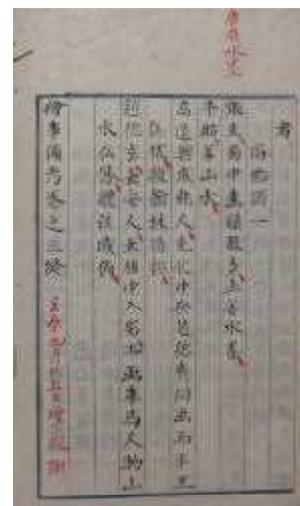


図5 『絵事備考』抄本(「椿山椿弼鑑蔵図書」印) 渡部信寄贈

東大にある博物館関係者の旧蔵書として真っ先に思い出されるのが、町田久成とともに博物館（東博の前身）の設置にかかわった田中芳男(1838-1916)の寄贈図書である。また言うまでもなく森鷗外も皇室博物館総長をつとめており、「鷗外文庫」には多くの美術書も含まれる。また江戸時代の普及版である『図絵宝鑑』（図6）は江戸の文人画家・岡本豊彦(1773-1845)旧蔵書で多くの朱字書込があり、明治以降は片野邑平、四郎の所蔵となった。この親子は集古会のメンバーとしても知られ、四郎は帝国博物館美術部にも勤務、林羅山『後素説』（総合図書館）は奥書から「博物館本」（現在は東博史料館所蔵〔QA-478〕）を手写したものである。また関東大震災後、本学の総合図書館に多くの茶道関係図書（図7）を寄贈して下さった松江松平家の松平直亮氏(1865-1940)はまた、東博にも「流れ園悟」墨蹟、「平治物語絵巻」（いずれも国宝）などの多くの名品を寄贈くださっている。

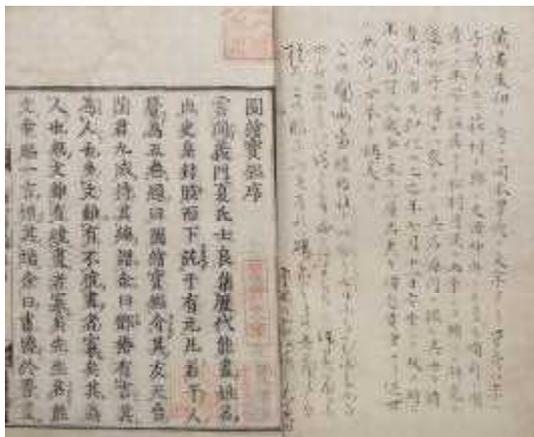


図6 『図絵宝鑑』（「岡本豊彦書画之記」印、「原宿文庫」、「片野蔵書」、「南葵文庫」）片野義雄寄贈

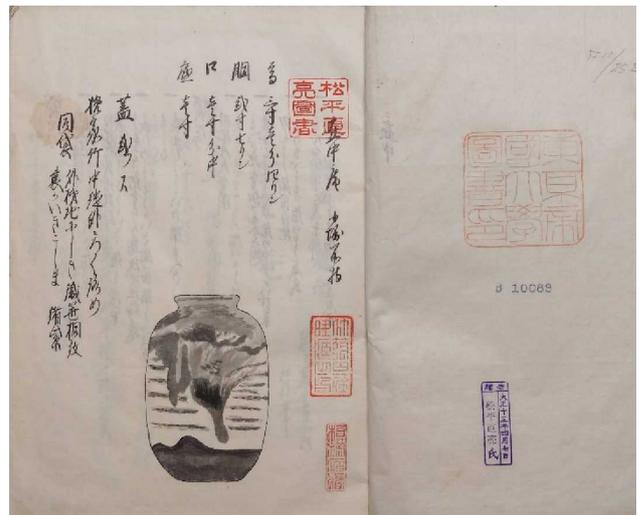


図7 『諸家名物記』松平直亮寄贈

このようにしてみると日本で最初の博物館(1872)と大学(1877)の成り立ちには、多く共通する人物がかかわってきたのがわかる。それは江戸時代までの学問や文化を「美術品（モノ）」と「書籍（テキスト）」にわけながら上野と本郷で継承し、江戸から明治、そして現代へと移り変わる中でも研究が発展してきたことを示していると言えるだろう。書庫の中で本を開くことはこんな、検索だけでは十分にひっかからない、上野と本郷を行き来した人々の存在に気が付き、自身の研究生生活も決して一人ではなりたないものであったことを感じる瞬間でもある。もし百年後にどんなにオンライン会議が発展したとしても、研究者たちは本を開くことで得られる心のつながりを求めて、上野と本郷周辺のリアルな世界をウロウロしているに違いないのである。

## メフルジュイー『ハームーン』

徳原靖浩

(とくはら やすひろ 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 特任助教)

イラン映画というと、アッバース・キヤーロスタミー(キアロスタミ)監督の『友だちのうちはどこ?』や『桜桃の味』、モフセン・マフマルバーフ監督の『ブラックボード 背負う人』や『カンダハール』などを思い浮かべる人が多いかも知れない。また近年では、アスガル・ファルハーデー監督の『彼女が消えた浜辺』、『別離』、『セールスマン』、ジャアファル・パナーヒー監督の『人生タクシー』といった作品も一般公開され好評を博している。

当然ながら、日本で知られていない作品にも、見るべきものは多くある。例えば、イラン映画界の巨匠の一人に数え入れられるはずのダーリユーシュ・メフルジュイー監督(1939年生)の作品は、管見の限り日本で一般公開されたことがなく、『イラン映画をみに行こう』(ブルース・インターアクションズ、2002年)、『映画で旅するイスラーム』(論創社、2008年)といったガイドブックでも、彼の作品は一切触れられていない。

このことは、メフルジュイーが凡庸な、紹介に値しない映像作家だということの意味しない。彼の作品はイラン国内や海外の映画祭で数々の賞を獲得している。特に、彼の出世作となった『牛 Gāv』(1969年製作)は、1970年代にイラン映画の新時代を切り開いた「ニュー・ウェーブ」の潮流を代表する作品とされ、イラン映画史を語る上で無視することのできない作品である。

彼の作品が日本で紹介されてこなかったのには、様々な理由があると思われるが、作品自体に関して言えば、彼の作品には、そのときどきのイラン社会が抱える問題をアレゴリカルに描くものが少なくない。イランに住むイラン人にとっては分かりやすいメタファーでも、日本人には何を示唆しているか分かりにくい。

例えば、ゲオルグ・ビューヒナーの戯曲『ヴォイツェック』の(かなり自由な)翻案である『郵便配達人 Postchi』(1970年製作、1972年公開)は、郵便配達と地主の召使を掛け持ちしながら宝くじに夢を託す無産階級の性的不能の男タギーが、地主の甥で西洋帰りの技師に妻を寝取られ、最終的に錯乱状態に陥り妻を刺殺してしまう話である。映画のラストでは、殺害現場で犯人の人物像について訊いて回る記者に、彼は泥棒だった、狂人だったと関係者たちが証言していくが、最後の一人が、「彼は従順な人間だった、従順な人間だった、従順な人間だった・・・」と、繰り返す。単なる嫁さんを寝取られておかしくなった可哀そうな男の話ではなく、地主と結託して西洋型の近代化を強行する国王の専制政治の言いなりになっていたらどのような結末が待っているかを警告する映画であり、マスウード・キーミーヤーイー監督の名作『鹿たち Gavaznhā』(1974年)と並んで、搾取され虐げられた無産階級の反抗を煽る、いたって革命的な作品である。

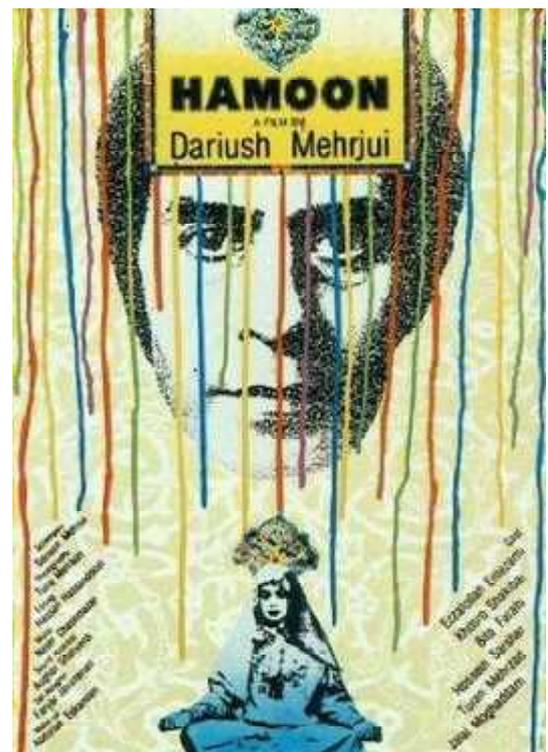
また、比較的新しい作品の一つである『サントゥール奏者 Santūri』（2006年製作）では、宗教と政治が個人の生き方までも支配するイラン革命後の社会で、希望も気力もなく社会から取り残される若者の問題を、アリーというサントゥール奏者に擬して描いている。サントゥールという伝統的な打弦楽器の卓越した奏者でありながら、（イランでは認められない）ロックバンドでの演奏にこだわるために自由な音楽活動ができないアリーは、現実から逃避するために麻薬に溺れ、家族からも見放され、アパートマンを追い出された末にホームレス状態になる。変わり果てた姿でゴミをあさっているところを、新しい夫とカナダへ移住しようとしている妻に偶然目撃されたアリーは、妻の連絡を受けた父親によって保護され、病院で麻薬中毒から回復するための治療とリハビリを受ける。人気俳優を起用し、エンターテインメント作品として成立させつつも、イラン革命後に生まれた若者たちを宗教によって縛り付けるだけで支援してこなかった政治への批判を滲ませた作品である。

さて、ここまでで紙幅の半分を費やしてしまっただが、ここで、私の専門であるイラン思想史の観点から興味深いと思える作品を紹介したい。メフルジュイー監督の最高傑作とも言われる『ハームーン』（1989年製作）である。

時代的にはちょうど上記の『郵便配達人』と『サントゥール奏者』の中間にあたる、イラン・イラク戦争終結（1988年）の直後の時期、あるいはイラン革命の指導者ホメイニーが死去（1989年6月）した頃に製作された『ハームーン』は、ソール・ベローの小説『ハーツォグ』の大胆な翻案——ほぼ別の作品とってよい——であると同時に、イランの知識層の状況を描写した作品として知られている。

主人公のハミード・ハームーン——

「ハームーン」は人の住めない荒地や砂漠を意味する——は、妻マフシードとの7年にわたる結婚生活の末、妻の側から離婚を請求されている。映画は、別居中のハミードが離婚調停のために裁判所に行き、激昂して離婚を拒否した上、調停を放棄してその場から立ち去り、行く先々で幾つかのトラブルを起こし、最終的に海辺で地主と口論した末、逆上して海へと入っていき溺れるまでの、およそ1日の出来事を描いている。その随所に過去の回想シーンが挿入されており、それによって妻との馴れ初めや破局にいたる顛末が説明されている。また、ところどころに挿入される、ハミードが見る幻想的な悪夢や白昼夢のシーンが、ハミードの妄念と、徐々に狂気へと向かっていく様を示している。



『ハームーン』のポスター

出典：

[https://en.wikipedia.org/wiki/File:Hamoun\\_poster.jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/File:Hamoun_poster.jpg)

例えば、映画冒頭に挿入された「フェリーニ『8 1/2』風」と言われる夢の場面では、

白い衣装を身にまとった登場人物たちが砂浜に集まり、小高い砂の丘の上に、巨大なスクリーンが立っているのを見る。スクリーンの中から、角の生えた黒い悪魔のような男が現れ、妻を連れ去っていくが、それは後の物語の中では妻の不貞の相手と疑われる資産家の人物である。妻を奪われ、他の登場人物たちに嘲笑されるハミード。そしてハミードの頭を大きな岩で叩き潰そうとする大男は、物語では精神科医として登場する。

幾つかの回想シーンによれば、結婚前のハミードは、イランや西洋の思想・文学に精通し、自著になる短編小説集も刊行している（ただし、映像では非常に薄っぺらなものであることが強調されている）、一端の知識人であった。

結婚生活が破綻する背景には、一個人として自由に振舞う妻への不信からくる夫の暴力、妻の抽象画や精神世界への関心に対する夫の無理解があった。そして夫は、上述の夢に暗示されていたように、妻のカウンセリングにあたる精神科医を、夫婦仲を妨害する存在と見ている。それだけではない。ハミードの友人である別の精神科医が彼に忠告するところでは、マフシードの母はハミードこそが精神異常を来していると考えており、夢に悪魔として登場していた資産家のアズィーミー氏と再婚させることを考えている。そしてマフシードとアズィーミー氏は既に「プラトニックでない関係」にあるという。

ハミードは、一向に進まない博士論文の執筆に捕らわれながら、財務事務所の仕事や、医療機器のセールスなど複数の仕事を掛け持ちして生計を立てているが、ビジネスの仕事にやる気を見いだせず、どれもうまくいかない。皮肉にも、彼の論文のテーマは「愛と信仰」である。それが、現実の愛情や信頼に結びついていない観念的なものであることは明らかである。そして、今

や生きていくために必要とされているのはそのような観念でも思想でもなくマネーであり、競争するライバルは、思想や文学で彼らを先導してきたヨーロッパではなく、いまや経済力と技術力でイランに進出してくる日本や台湾、東南アジアの企業である。

8年に及ぶイラクとの戦争によって数千億ドルにも相当する経済的損失を被ったと言われるイランが、経済や技術の面で急成長するアジア諸国に水をあけられる中、王政を打倒して理想の共和国を牽引してきたはずのインテリたちは、現代社会が必要とする新しい価値を認めることができないまま、実存的基盤を失い、もはや社会にも家庭にも居場所を失くしてしまっている。

この映画は、このようなイランの知識層の状況を、独りよがりな思想と行動が釣り合わない、理想と過去にしがみつき、現実が見えなくなったどこか憐れな男として描いている。自分がハミードのようになっていくことに気づかない現実の知識人に対して、戯画化された自画像を突き付ける挑戦的な作品だと言える。

こんな映画を日本で公開しても、観る人にはピンとこないかも知れない。実のところ私にもまだ分からないところが多い。しかし翻って言えば、外国研究の楽しみとは、研究対象である地域の文化に対して、部外者の物差しで良し悪しを測るのではなく、彼らの物差しを知り、彼らの視点と自分の視点の両方で物事を眺め、語れるようになることである。日本で知られていないアジア映画の迷宮に敢えて飛び込み、迷いに迷ってみるのも、迷路を俯瞰するより楽しいに違いない。

# アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide/guide>

場 所：総合図書館 4 階

開館日：以下閉館日を除くすべての日

閉館日：年末年始(12月28日～1月3日)  
定例休館日(概ね毎月第4木曜日)  
夏季の一斉休業日(2日間)  
試験等大学行事のための閉館日  
その他臨時閉館日

貸出冊数・期間：10冊・30日(教職員・学生)

カウンターサービス：平日9：00～17：00

開館時間：

曜日等	通常期	8月・3月
月～金曜日	8：30～22：30	8：30～21：00
土・日・祝日	9：00～19：00	9：00～17：00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outline/gakugai>

## 次号の予定

第5号は10月1日に発行予定です。

これまでの連載に加え、次号ではアジア研究図書館の収書状況についての途中経過報告、RASARL教員が企画運営した国際シンポジウムについての報告などを予定しております。

ニューズレターへの情報提供・投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館宛([asialib@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib@lib.u-tokyo.ac.jp))お知らせ下さい。

## 編集後記

第4号をお届けいたします。今号より編集者が交替し、研究開発部門が担当することになりました。これまでの体裁を堅持することに努めましたが、思わぬ誤りもあろうかと存じます。御批評のほど何卒よろしくお願い申し上げます。 [J]